

# 幼児の有能感・受容感と母親の自尊感情、しつけ行動との関連

園田 菜摘

## 問 題

自分に自信がある、自分に満足している、自分が好きだ、などの全体的な自己評価の感情は自尊感情と呼ばれ、あらゆる場面での人の考え方や行動、生き方に影響を与えている。自尊感情は8歳頃から形成されるが (Harter, 1982)、幼児でも自他の能力の評価の比較を含む社会的比較を行っており (高田, 2010)、技能面で自分なりに何かができるという「有能感」や他者から受け入れられているという「受容感」によって領域的に自己評価をすることができるが見出されている (Harter & Pike, 1984)。

桜井 (1983) は、Harter (1982) の児童・生徒の有能感を測定する尺度の日本語版を作成し、小学校3年生～中学校3年生までの児童・生徒に実施した。その結果、Harter のアメリカにおける調査では認められなかったが、学年が上がるにつれて学習面の有能感と全体的な自己価値が低下する傾向が示されている。このことは、有能感の発達には文化による違いがあることを示唆していると考えられる。幼児については、桜井・杉原 (1985) が Harter & Pike (1984) の尺度を用い、日本における尺度の信頼性と妥当性を確認し、幼児の有能感が児童および生徒よりも高いことを示している。中澤ら (2009) も同様に、幼稚園年長児は学習面、運動面について高い有能感を持っていることを示しており、有能感の高さが幼児期の特徴であることが示唆されている。しかし、日本の研究では対象が年長の幼児に限られており、より幼い年齢の幼児の特徴についても検討する必要がある。特に幼児期は、領域的な自己評価が形成される始める時期であるため、その文化的な特徴も含めた詳細な検討が必要とされている。

子どもの自己評価に与える親の影響については、Kawash ら (1985) が児童期の男子にとっては母親の受容、ゆるい統制、自律性の尊重の組み合わせが最も高い自己評価をもたらし、女子にとっ

ては受容、厳格なしつけ、自律性の尊重が最適な組み合わせであることを示している。また、小学校5、6年生を対象にした研究 (Growe, 1980) で、母親の支持が大きいほど、また罰が穏やかなほど子どもの自己評価が高いことが示されている。日本においては、小学校4～6年生の自己評価は母親の子どもへの信頼感と負の相関があることが示されている (佐藤, 2009)。このように、児童の自己評価には母親の養育態度や意識が影響していることが明らかになっているが、有能感や受容感といった領域的な自己評価が始まる幼児期において養育者の影響を検討した研究はほとんど行われていない。しかし、幼児期においても親の高い自尊感情やしつけ行動が子どもの有能感・受容感を高める重要な要因である可能性が考えられる。

以上のことから、本研究では3歳児も含めた幼児期の有能感・受容感の年齢的な発達の特徴と、母親の自尊感情、しつけ行動との関連について詳細に検討することを目的とする。

## 方 法

### < 調査対象 >

山形市内の私立幼稚園に在園する年少児20名 (男児11名、女児9名、平均48.2ヵ月：範囲43～54ヵ月)、年中児32名 (男児17名、女児15名、平均60.66ヵ月：範囲54～66ヵ月)、年長児33名 (男児14名、女児19名、平均71.82ヵ月：範囲66～78ヵ月)、及びその母親の計85組を対象とした。

### < 調査手続き >

#### ①母親の自尊感情、しつけ行動の測定

2001年9～10月にかけて、母親の自尊感情・しつけ行動を測定するために質問紙調査を行った。質問紙は幼稚園を通して配布・回収を行った。

母親の自尊感情に関する質問項目は、Janis & Field (1959)、Rosenberg (1979)、成田ら (1995) を参考に、5段階評定で40項目を作成した。因子分析 (主因子法；プロマックス回転) を行った結果、

4つの因子が抽出され、第1因子を「劣等感」、第2因子を「社会的場面における不安」、第3因子を「効力感」、第4因子を「自己価値」と命名した(表1参照)。

表1. 母親の自尊感情の因子負荷量

質問項目	因子1	因子2	因子3	因子4
35 他の人が自分と一緒にいたいと思っているかどうかについて気にする	.847	-.140	.058	.008
28 友達や知り合いの中に、自分のことをよく思っていない人がいるかもしれないと、考えこむことがある。	.838	.000	.082	.006
11 時々、自分は役に立たない人間だと思うことがある。	.718	-.135	-.191	-.068
22 自分について落ちこんだり、自分には価値がないと感じることがある。	.715	.093	-.046	-.022
27 自分は全くだめな人間だと思うことがある。	.696	.091	.068	-.131
30 自己嫌悪をおぼえることがある。	.642	.017	-.163	.044
33 とんでもないミスや、ばかにされるような失敗をするとそのことが気になって仕方がない。	.629	.063	.089	-.193
4 ミスをする、自分のせいだと強く感じる。	.613	.015	.212	-.033
37 自分はうまくやれることなど全然ない、という気持ちになることがある。	.605	-.001	-.202	-.117
2 他の人が自分のことをどのように考えているかについて、気にする。	.541	.208	.076	.109
19 自分の人生を、他の人が成功と思っているか、失敗と思っているかが気になる。	.528	.056	.042	.161
25 何事も完ぺきでないと気がすまない。	.475	-.016	.351	.099
32 自分はまわりの人に受け入れられていると思う。	-.442	-.090	.048	.043
17 人前に出ると、はにかみをおぼえることがある。	-.062	.867	.223	.005
10 自分から友達をつくるのが上手な方だ。	.024	-.812	.020	-.071
12 他の人たちがすでに集まって話し合っているところに、自分一人で入っていくとき、気兼ねや不安をおぼえる。	.140	.766	.020	.050
23 他の人が見ていると、うまくやろうとして、取り乱したり、あがったりする。	.315	.589	.019	-.018
14 自分が他の人とうまくつきあえるかどうかについて、不安になることがある。	.402	.523	-.086	.049
31 非常にややこしく見えることには、手を出そうとは思わない。	.030	.498	.009	-.132
9 思いがけない問題が起こったとき、それにうまく対処できないのではないかと思う。	.319	.450	-.037	-.115
16 何かをしようと思っても、自分にそれができるかどうか不安になることがある。	.199	.449	-.367	.031
7 人と一緒にいるとき、どんなことを話題にしたらいかが困ることが多い。	.341	.420	-.117	.074
29 今の自分のままでいたい。	-.008	-.364	-.207	.296
40 初めはうまくいかないことでも、できるまでやり続ける。	.173	-.021	.795	-.121
21 失敗しても一生懸命やろうと思う。	-.110	.270	.692	.144
6 何かをやり終える前にあきらめてしまう。	-.022	-.006	-.599	-.135
36 自分は、非常に甘やかされて育った。	.187	-.139	-.599	.168
1 おもしろくないことをするときでも、それが終わるまでがんばり続ける。	-.035	.109	.551	-.003
26 何かをしようと思ったら、すぐに取りかかる。	.138	-.178	.456	.090
3 人より運動が上手だ。	.039	-.267	.429	-.110
39 しなければならないことがあっても、なかなかとりかからない。	.345	.203	-.350	.204
8 自分には、いろんなよい素質があると思う。	-.199	.027	-.046	.848
24 自分のいろいろな能力について、全体的に自信をもっている。	.341	-.399	.103	.574
13 物事を人並み程度には、うまくやれる。	.079	.122	.212	.539
18 自分は、よい人間だと思う。	-.004	.007	-.256	.519
20 自分には、得意なことがあまりない。	-.023	.120	-.192	-.495
38 自分は価値のある人間だと感じている。	-.367	.346	.073	.483
5 だいたいにおいて、自分に満足している。	-.165	-.183	-.193	.472
34 何事も、計画通りにうまくできる自信がある。	.071	-.155	.288	.371
15 いつか自分は、まわりから尊敬される人間になると確信している。	.245	.064	.184	.365

母親のしつけ行動に関する質問項目は、柏木(1988)の母親のしつけ行動の調査票を参考に、5段階評定で36項目を作成した。因子分析(主因子法; プロマックス回転)を行い、負荷量が0.30

未満の項目を除いた結果、24項目において3つの因子が抽出され、第1因子を「指示的しつけ」、第2因子を「自立促進的しつけ」、第3因子を「過保護的しつけ」と命名した(表2参照)。

表2. 母親のしつけ行動の因子負荷量

質問項目	因子1	因子2	因子3
33 子どもに「～しなさい」と指示することが多い。	.751	.182	.091
7 ほめてやるよりも、叱ったり注意することが多い。	.722	-.056	-.054
17 子どもに「～してはいけない」と言うことが多い。	.604	.095	.060
9 子どもがぐずぐすしたり、まごまごしていると、早くするようにうながす。	.526	.073	-.026
18 子どもが失敗したときでも、がんばったことをほめる。	-.427	.198	.164
22 子どもを、きょうだいや友達と比較する。	.399	.082	.183
20 家の中では、少々いたずらをして叱らない。	-.328	.042	-.152
21 お風呂では、一人で体を洗わせる。	-.139	.684	.029
30 脱いだ服は、自分で片づけさせる。	.248	.563	.071
16 子どもが夜中トイレに行くとき、一人で行かせる。	.354	.539	-.075
1 お手伝いをさせている。	.085	.517	.078
14 幼稚園に持っていくものは、親が点検したり手伝ったりしないで、一人で用意させる。	-.017	.501	-.149
10 その日に着る服を、自分で決めさせる。	.002	.489	-.040
23 子どもに自分の考えを言わせるようにしている。	-.206	.486	-.146
13 子どもが自分について話すのをきちんと聞く。	-.345	.480	.274
34 短時間なら、一人で留守番させる。	.310	.331	-.226
35 子どもが失敗したり、まちがわないように手を貸すようにしている。	.182	-.054	.695
29 友達の家や遊び場には、子どもを一人で遊びに行かせない。	-.033	.069	.692
3 食事のとき、魚や肉などを食べやすいように小さく切ってあげる。	-.293	.070	.544
36 入園前に、他の子どもと遊ばせていた。	-.003	.015	-.505
31 子どもがやろうとしていることがうまくできそうにないときは、やめるようにうながす。	.190	-.217	.438
26 同じ幼稚園以外の子どもと遊ばせている。	-.017	.138	-.359
24 子どもに一人でさせると、遅くなったり、うまくできなかったりするので手伝ってあげる。	.304	-.149	.339
2 友達と遊ぶときは、けんかをせずに仲良く遊ぶように、注意したり誘導したりする。	.090	.206	.315

② 幼児の有能感・受容感の測定

2001年10～11月にかけて、幼児の有能感・受容感を測定するために、幼稚園の1室で幼児1人1人に対する面接調査を行った。

面接での質問項目は、幼児の有能感・受容感測定尺度(Harter & Pike, 1984)の日本語版の尺度(桜井・杉原, 1985)を用いた(表3参照)。尺度には、「学習面の有能感」、「運動面の有能感」、「仲間からの受容感」、「母親からの受容感」について各7項目計28項目がある。幼児への質問用に男児用と女児用の2種類の絵カードを作成し、左右の片方に

有能でない/受容されていない子どもを描いた。絵カードの半数は右側に有能な/受容されている子どもが描かれ、残りの半数は左側に描かれているようにした。また、絵の下には大小2つの円が描かれており、幼児が左右どちらかの絵を選択した後で、その行動の程度や頻度の多さを尋ね、大小の円の一方を選択させた(4段階評定)。幼児の回答から、有能感/受容感の高い順に4、3、2、1点と得点化した。そのため、それぞれの尺度の得点の範囲は7～28点となる。

表3. 幼児の有能感・受容感測定尺度の項目

学習面の有能感	運動面の有能感
<ul style="list-style-type: none"> <li>・パズルができるか</li> <li>・自分の名前を読めるか</li> <li>・絵を描くのが上手か</li> <li>・いろんな曜日を言えるか</li> <li>・数を数えるのが上手か</li> <li>・カルタを取れるか</li> <li>・自分の名前をひらがなで書けるか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ブランコがこげるか</li> <li>・ジャングルジムに登るのが上手か</li> <li>・ひもをリボン結びにできるか</li> <li>・スキップが上手か</li> <li>・片足でケンケンするのが上手か</li> <li>・でんぐり返しができるか</li> <li>・ボールを続けてつけるか</li> </ul>
仲間からの受容感	母親からの受容感
<ul style="list-style-type: none"> <li>・一緒に遊べる友達がいるか</li> <li>・家に遊びに来る友達がいるか</li> <li>・一緒にゲームする友達がいるか</li> <li>・友達と一緒に遊ぼうと誘われるか</li> <li>・幼稚園の庭で一緒に遊べる友達がいるか</li> <li>・友達の家に遊びに行くか</li> <li>・失くしたものがあるとき一緒に探してくれる友達がいるか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お母さんは笑いかけてくれるか</li> <li>・お母さんは好きな食べ物を作ってくれるか</li> <li>・お母さんは行きたいところに連れて行ってくれるか</li> <li>・お母さんは遊んでくれるか</li> <li>・お母さんはお話してくれるか</li> <li>・お母さんはほめてくれるか</li> <li>・お母さんは本を読んでくれるか</li> </ul>

「学習面の有能感」、「運動面の有能感」、「仲間からの受容感」、「母親からの受容感」それぞれ7項目について主成分分析を行ったところ、すべて負荷量 0.25 以上で1つの因子にまとまったため、得点を合計して「学習面の有能感得点」( $\alpha = .51$ )、「運動面の有能感得点」( $\alpha = .63$ )、「仲間からの受容感得点」( $\alpha = .77$ )、「母親からの受容感得点」( $\alpha = .75$ )とした。

## 結果

### (1) 幼児の有能感・受容感の特徴

有能感・受容感を測定した結果、年少児、年中児、年長児の「学習面の有能感得点」、「運動面の有能感得点」、「仲間からの受容感得点」、「母親か

らの受容感得点」の平均値は、すべて28点満点中21点以上で、幼児は高い有能感・受容感を持っていることが示された(表4参照)。さらに、学年(年少児、年中児、年長児)によって得点の高さに違いが見られるかを調べるために一元配置の分散分析を行ったところ、「仲間からの受容感得点」( $f=4.81, p<.05$ )と「母親からの受容感得点」( $f=7.73, p<.01$ )において有意な違いが示され、多重比較の結果、年少児の方が年中児よりも( $p<.01$ )「仲間からの受容感得点」が高く、年少児の方が年中児( $p<.05$ )、年長児( $p<.01$ )よりも「母親からの受容感得点」が高いことがそれぞれ示された。

また、幼児の有能感・受容感に有意な性差や月齢との関連は見られなかった。

表4. 幼児の有能感・受容感の平均値(標準偏差)

	学習面の有能感得点	運動面の有能感得点	仲間からの受容感得点	母親からの受容感得点
年少児	25.39(2.43)	24.89(4.13)	25.56(3.07)	25.67(2.70)
年中児	24.38(3.14)	24.03(3.06)	21.66(4.95)	22.63(4.07)
年長児	25.79(2.26)	25.06(3.30)	23.24(4.12)	21.21(4.19)

(2) 幼児の有能感・受容感と母親の要因との関連

まず、母親の自尊感情の下位尺度と幼児の有能感・受容感得点との間に関連があるかについて、相関分析を用いて調べた。その結果(表5参照)、年少児と年長児において関連があることが示された。年少児においては、母親の自尊感情の「社会的場面における不安」と年少児の「仲間からの受容感得点」、「母親からの受容感得点」との間に有意な正の相関が示され、母親が社会的場面において不安が高いほど、子どもは自分が仲間から受容されていると感じていること、母親から受容され

ていると感じていることがそれぞれ示された。また、母親の「社会的場面における不安」は年少児の「学習面の有能感得点」と有意ではないが正の相関がある傾向が示され、母親が社会的場面において不安が高いほど、子どもは自分が学習面で有能であると感じている傾向にあった。年長児においては、母親の自尊感情の「効力感」と年長児の「学習面の有能感得点」との間に有意な負の相関が示され、母親が自分に効力があると感じているほど、子どもは自分が学習面で有能でないと感じていることが示された。

表 5. 母親の自尊感情と幼児の有能感・受容感との相関

	母親の自尊感情			
	劣等感	社会的場面 での不安	効力感	自己価値
[年少児]				
学習面の有能感得点	0.058	0.408 +	0.082	0.004
運動面の有能感	0.226	0.246	0.001	-0.208
仲間からの受容感得点	0.201	0.497*	0.041	-0.209
母親からの受容感得点	0.278	0.510*	0.088	-0.278
[年中児]				
学習面の有能感得点	0.133	0.016	-0.014	-0.088
運動面の有能感	-0.136	-0.043	0.036	0.113
仲間からの受容感得点	0.004	-0.074	-0.007	0.063
母親からの受容感得点	-0.009	-0.008	-0.131	-0.165
[年長児]				
学習面の有能感得点	0.005	0.058	-0.380*	-0.249
運動面の有能感	0.189	-0.095	-0.078	-0.073
仲間からの受容感得点	0.226	0.141	0.202	-0.074
母親からの受容感得点	0.202	0.053	0.069	0.008

\*p<.05, +p<.10

次に、母親のしつけ行動の下位尺度と幼児の有能感・受容感との間に関連があるかについて、相関分析を用いて調べた。その結果(表6参照)、年中児において母親のしつけ行動の「自立促進的しつけ」と年中児の「学習面の有能感得点」との間に有意な正の相関が示され、母親が子どもの自立をうながすようなしつけ行動を多く取るほど、子どもは自分が学習面で有能であると感じていることが示された。また、母親のしつけ行動の「過保護的しつけ」と年中児の「運動面の有能感得点」

との間に有意ではないが負の相関がある傾向が示され、母親が子どもに手を貸しすぎるしつけ行動を多く取るほど、子どもは自分が運動面で有能でないと感じる傾向にあった。年少児においては、母親の「過保護的しつけ」と年少児の「母親からの受容感得点」との間に有意ではないが正の相関がある傾向が示され、母親が手を貸しすぎるしつけ行動を多く取るほど、子どもは母親から受容されていると感じる傾向にあった。

表 6. 母親のしつけ行動と幼児の有能感・受容感との相関

	母親のしつけ行動		
	指示的しつけ	自立促進的しつけ	過保護的しつけ
[年少児]			
学習面の有能感得点	0.128	-0.173	-0.092
運動面の有能感	0.313	-0.241	0.212
仲間からの受容感得点	0.102	-0.191	0.315
母親からの受容感得点	0.220	-0.161	0.449+
[年中児]			
学習面の有能感得点	-0.050	0.381*	0.001
運動面の有能感	0.056	-0.121	-0.352+
仲間からの受容感得点	0.160	-0.282	-0.142
母親からの受容感得点	0.159	-0.186	0.151
[年長児]			
学習面の有能感得点	-0.268	0.158	-0.229
運動面の有能感	-0.116	0.102	-0.057
仲間からの受容感得点	0.038	0.024	-0.122
母親からの受容感得点	-0.143	-0.117	-0.026

\* $p < .05$ , + $p < .10$ 

### 考 察

本研究では、3歳児を含む年少児から年長児までの幼児を対象に、有能感・受容感の特徴について調べた。その結果、どの領域においても全体的に平均値が高く、先行研究（桜井・杉原, 1985; 中澤ら, 2009）と同様に幼児は比較的肯定的な自己評価をしていることが示された。この理由として、幼児は他児と客観的に比較されることがあまりなく、比較する能力もそれほど発達していないため、自分の能力を的確に把握することがまだできないこと、さらに親や教師など周囲の人は幼児にはあまり高度なことは要求しないので、自分の行動を否定されるような失敗経験が少ないことが指摘されている（桜井・杉原, 1985）。さらに、本研究では年少児から年長児までの有能感・受容感の比較を行ったところ、特に年少児の仲間からの受容感、母親からの受容感が高いという特徴が示された。4歳になると徐々に仲間との関わりが親密になっていき、いざこざも増えていくが（中島ら, 1992）、年少児ではこのような経験が少なかったり、仲間との日常的な関わりから仲間関係について客観的に判断する力が弱いため、仲間からの受容感につ

いてより肯定的な自己評価になったのかもしれない。母親からの受容感についても、母親のしつけ行動には学年における有意な違いは見られなかったことから（all  $ps > .19$ ）、子どもの年齢によって母親の方の関わり方が大きく異なったためとは考えにくく、年少児は母親との日常的な関わりを正確に客観的にとらえておらず、より肯定的なバイアスのかかった見方をしている可能性が考えられる。

幼児の有能感・受容感と母親の自尊感情、しつけ行動との関連については、学年によって関連の仕方に違いが見られた。まず年少児については、母親の自尊感情における社会的場面での不安の高さは、子どもが自分が仲間から受容されていると感じること、母親から受容されていると感じることの高さと関連していた。他者と関わる場面で不安を感じる母親は、あまり外交的ではなく、家庭で幼いわが子にその分のエネルギーを注いで関わりが多いことが考えられ、それが子どもが母親から受容されていると感じることにつながったのかもしれない。また、幼児の母親からの受容感得点は仲間からの受容感得点と高い相関関係が

あったことから ( $r=.86, p<.001$ )、母親からの受容感  
は仲間との関係に般化され、幼児の仲間からの受容感も高くなった可能性が考えられる。年中児については、母親の自立促進的なしつけ行動が子どもの学習面の有能感の高さと関連していた。児童を対象にした先行研究 (Kawashら, 1985) でも、子どもの自己評価を高める要因の一つとして母親からの自律の尊重が含まれることが示されており、4歳以降、子どもの自己制御能力が伸びて様々なことを身に着ける時期には、母親が子どもにある程度一人でできるようにしつけることは子どもの有能感を高めることにつながりやすいのかもしれない。年長児については、母親の自尊感情の効力感の高さが子どもの学習面の有能感の低さに関連していた。幼児期の中で最も発達し、様々な能力を身に着け“自信”を持っている年長児にとっては (中島ら, 1992)、効力感の高い母親はかえって子どもにとって過干渉の印象を与え、母親が手出しをするのは自分の能力が低いためだ、といった有能感の低さをもたらす原因となるのかもしれない。

以上のように、本研究では年少児から年長児までの幼児を対象に有能感・受容感の特徴について調べた結果、特に年少児は仲間や母親から受容されていると自分を肯定的にとらえていることが示された。しかし、本研究では1つの私立幼稚園しか対象にしておらず、人数も少なかったため、他の多くの年少児においても同様の傾向が認められるかについて再度検証することが必要である。さらに、本研究では母親のしつけ行動は年中児の有能感にはプラスに働くが、母親の自尊感情は年少児、年長児の有能感・受容感にマイナスに働く可能性が示唆された。しかし、母親の自尊感情が高いと幼児の自己評価が低くなる、といった単純な関係のみが存在しているとは考えづらい。今後は、母親と幼児双方の測定尺度を見直すことも含めた新たな検討を行うことで、幼児期の自己評価の発達に母親がどのように影響するのかについて詳細に明らかにしていく必要があるだろう。

## 引用文献

- Grove, G. A. (1980) Parental behavior and self-esteem in children. *Psychological Reports*, 47, 499-502.
- Harter, S. (1982) The perceived competence scale for children. *Child Development*, 53, 87-97.
- Harter, S., & Pike, R. (1984) The pictorial scale of perceived competence and social acceptance for young children. *Child Development*, 55, 1969-1982.
- Janis, I. L., & Field, P. B. (1959) Sex differences and factors related to persuasibility. In C. I. Hovland & I. L. Janis (Eds) , *Personality and persuasibility* (pp. 55-68) . New Haven, CT: Yale University Press.
- 柏木恵子 (1988) 幼児期における「自己」の発達：行動の自己制御機能を中心に．東京：東京大学出版会．
- Kawash, G. F., Keer, E. N., & Clewes, J. L. (1985) Self-esteem in children as a function of perceived parental behavior. *Journal of Psychology*, 119, 235-242.
- 中島誠・成田朋子・高橋依子・庄司留美子 (1992) 発達臨床心理学．京都：ミネルヴァ書房．
- 中澤潤・泉井みずき・本田陽子 (2009) 幼児の有能感の認知と遂行との関連：幼児楽観性の視点から．千葉大学教育学部研究紀要, 57, 137-143.
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 (1995) 特性的自己効力感尺度の検討：生涯発達の利用の可能性を探る．教育心理学研究, 43, 306-314.
- Rosenberg, M. (1979) *Conceiving the self*. New York: Basic Books.
- 桜井茂男 (1983) 認知されたコンピテンス測定尺度 (日本語版) の作成．教育心理学研究, 31, 245-249.
- 桜井茂男・杉原一昭 (1985) 幼児の有能感と社会的受容感の測定．教育心理学研究, 33, 237-242.
- 佐藤淑子 (2009) 日本の子どもと自尊心．東京：中公新書．
- 高田利武 (2010) 日本人幼児の社会的比較：行動観察による検討．発達心理学研究, 21, 36-45.